

中学校の学年会を活用したチーム援助をめざして

援助ニーズの高い生徒への的確な見方・有効なかかわり方をもつための方法を探る

学校教育相談研究会議

板橋美由紀¹

金丸 幸生²

小久保裕之³

筒井 愛子⁴

要 約

教科担任制の中学校では、学級担任が学級の子どもとかかわる時間が少なく、教科担任も自分の授業以外の子ども様子は把握しにくい状況があるなど、教師が援助ニーズの高い子どもを多面的にとらえることがなかなか難しい現状がある。

本研究会議では中学校に視点を当て、子どもを多面的にとらえる機会として新たに会議を設定するのではなく、学年会を活用することにした。また、短時間で有効な会議となるように本研究会議でワークシートを作成した。そして、学年会とワークシートを通して、子どもにかかわる教師と養護教諭、スクールカウンセラーが、援助ニーズの高い子どもを的確にとらえ、有効なかかわりがもてるような「チーム援助」へつなげられるように試みた。

学年会では抽出児を的確にとらえるというだけでなく、有効な手立ての交流や他の生徒への応用などにもつながることが明らかになった。ワークシートからは抽出児の多面的な姿が見えるようになり、教師の実践の振り返りへつながること、また、様々な副次的効果も明らかになった。

キーワード：学年会、ワークシート、チーム援助

目 次

主題設定の理由	194	4 研究の結果	200
1 現状～学習面～	194	(1)学年会	200
2 現状～行動面～	194	(2)ワークシート	204
3 現状～中学校～	195	研究のまとめ	206
研究の内容	195	1 考察	206
1 研究の目的	195	2 今後の課題	207
2 背景となる理論と考え方	196	参考文献	208
3 研究の方法	197	指導助言者	208

¹ 川崎市立西高津中学校教諭（長期研修員）

² 川崎市立稲田中学校教諭（研修員）

³ 川崎市立高津小学校教諭（研修員）

⁴ 川崎市立桜本小学校教諭（研修員）

主題設定の理由

「忙しくて時間がない」という実感を多くの教師がもっている一方で、反抗的・自己中心的な態度をとったり、心的エネルギーが下がっていたり、学習面で苦戦していたり、人間関係がうまく築けなかったりと、援助ニーズの高い子どもからのサインはますます増えている。また、サインが見えにくい子どもも増えている中、「この子を十分理解しているだろうか。」「この対応でいいのだろうか。」といった気持ちを多くの教師がもっているのではないだろうか。本研究会議は、そのような教師の思いと援助ニーズの高い子どもとをつなぎ、問題状況の解決をめざすための方法を探ることとした。

1 現状

～学習面～

川崎市の児童生徒の学習と生活についてのアンケート（平成17年度）では、教師は子どもの学習に対する姿勢や学力に

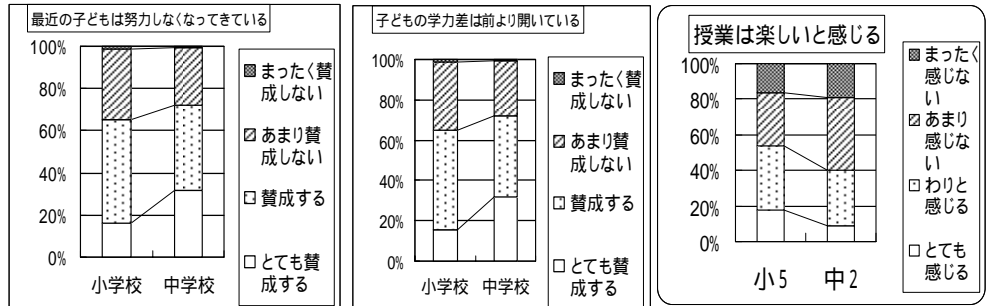


図1 教師から見た子どもたちの学習の様子

図2 子どもたちの授業への思い

疑問を感じている面があるという結果が出ている。しかし、多くの子どもは教師の授業に魅力を感じず、その傾向は中学校で強く現れていることも読み取れる(図1・2)。また、川崎市小・中学校教育基本調査(平成17年度)では、学校が楽しくないと感じている子どもは、授業中に教師から認められた経験が少ないという結果が出ている(図3)。これらの結果から、学校の楽しさや充実感を生み出すには、授業における教師と子どものかかわりが重要な要素の一つになるのではないかと考えられる。

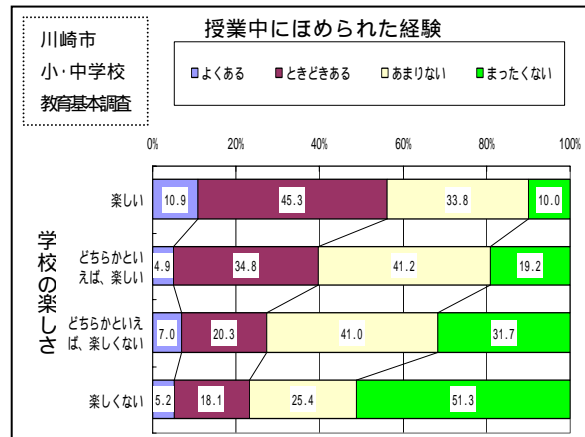


図3 学校の楽しさと授業中にほめられた経験の関係

2 現状 ～行動面～

文部科学省の調査からは、不登校・いじめ・暴力が中学生になってから急増していることがわかる(図4)。川崎市の近年の小学校における不登校の出現率は、全国平均に近い数値を示しているが、中学校では、川崎市は1.5倍に膨れ上がっている(図5)。しかし、中学校で急に不登校になるというよりも、小学校のときに何らかのサインが出ている場合が多いため、小学校から中学校への引継ぎが大切であるといえる。小学校では学級担任が一日を通して学級の児童と向き合いじっくり観察できるが、中学校では学級担任が学級の生徒とかかわる時間が短く、一人の教師がかかわる生徒の数も多い。定期的に複

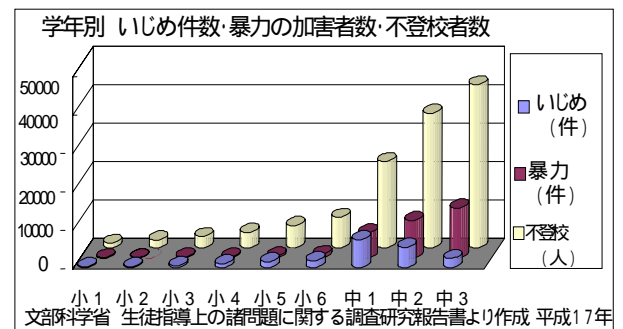


図4 中学生になってから急増する諸問題

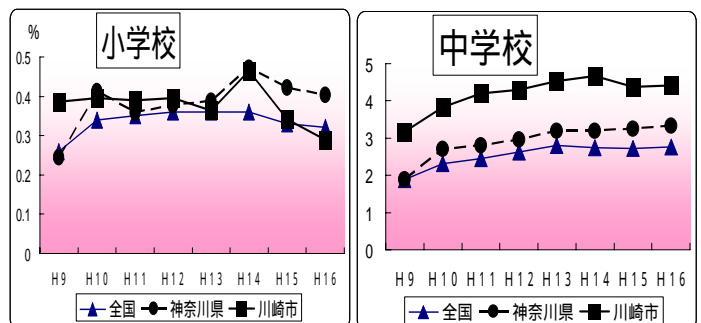


図5 全国・神奈川県・川崎市の不登校の出現率

数の教師が生徒についての情報交換を行う時間がなかなか取れず、一人一人の生徒を十分に把握することが難しい現状もある。そこで、本研究会議ではこのような状況にある中学校に視点を当てた研究を進めていくこととした。

3 現状 ~中学校~

中学生は心身ともに大きく成長するとともに、初めて人生の岐路に立つ時期でもある。近年は、対人関係をうまく築けず、集団生活が苦手な生徒が増えているといわれる。また、生徒だけでなく保護者へのきめ細かい対応が必要になってきているなど、問題は複雑化しており、学級担任が一人で問題を抱えたり、一部の教師だけが動いたりするような形では対応できなくなっている。一般的に中学校では、一人の生徒にかかわる教師の数が多い。また、本市では、今年度からスクールカウンセラーが全校に配置され、人材はさらに豊富になった。しかし、多忙な学校現場では、援助



図6 研究構想図

ニーズが高い生徒について情報を共有するために新たな会議を開くことは難しい現状がある。そこで、中学校でほぼ毎月行われている学年会の学級情報交換の時間を活用し、できるだけ短時間で情報を共有できる方法を考えることとした。さらに、心や体の健康を支える専門家である養護教諭や心理臨床の専門家であるスクールカウンセラーが学年会に参加し、専門家からの視点を加えて生徒を追っていくこととした。複数の目からとらえた情報は、個々の教師がもっている援助ニーズの高い生徒についての一場面だけの見方を多面的にとらえる見方につながり、それが的確な見方、有効なかかわりへ発展していくのではないかと考える。そのかかわりが広がれば、授業や日常生活などの一日の活動を通して、一人一人の生徒に合った援助が生まれるとともに、点から面への連続性のある有効なかかわりとなり、生徒が抱えている問題状況の解決への糸口になるのではないかと考え、本研究の主題を次のように設定した。

中学校の学年会を活用したチーム援助をめざして
援助ニーズの高い生徒への的確な見方・有効なかかわり方をもつための方法を探る

研究の内容

1 研究の目的

(1) 川崎市総合教育センターの先行研究から

本センターの学校教育相談研究会議では、ここ数年、学級担任が授業において児童生徒の思いを大切にしながらかかわる「教育相談的なかかわり」の姿勢が、児童生徒の安心感や達成感、効力感、信頼関係を築き、それが教師自身の成長へとつながるという研究が行われてきた。一方それらは、「担任と児童生徒」「授業中」という研究であり、「担任以外の教師と児童生徒」「学校生活のトータルな時間」でのかかわりについては、まだ検討されていない課題であると考え。

(2) 援助の必要な子どもたちのとらえ方

石隈(1996)は学校心理学の立場から、3段階の援助サービスが必要であるとしている(図7)¹⁾。

1) 石隈利紀 『学校心理学』誠信書房 1999年 p.144

本研究では、この中の二次的援助サービスの対象となる「気になる生徒」をどのように援助していくかという点に重点を置く。この段階の生徒は実際のところ見落されやすく、場当たりの指導を受けがちではないだろうか。問題状況を早期発見し、タイムリーな予防的援助をすることができれば、問題が解決する可能性は十分にあると考える。

(3) チームのとらえ方

二次的援助サービスを必要とする生徒が抱える問題の解決のためには、生徒の一場面だけを理解した教師が、共通した理解をもたずにかかわる状態では不十分であると考えられる。多面的な情報や、その時点で必要と考える目標などの情報をもった複数の教師が生徒とかかわれば、学校生活の中で生徒が安心して過ごせる時間が増えていくことにつながるのではないだろうか。本研究では、それをチームとしての援助であるにとらえる。この場合のチームとは、援助ニーズが高い生徒に対して一斉に同じ援助を行うことではなく、「共通した情報を持ちながら、同じ目標のもとで複数の教師がそれぞれにできることを行う援助の形」であるととらえ、その上で生徒の変容を追いながら、次の2点を研究の目的として、実践・検証を進めていくこととした。

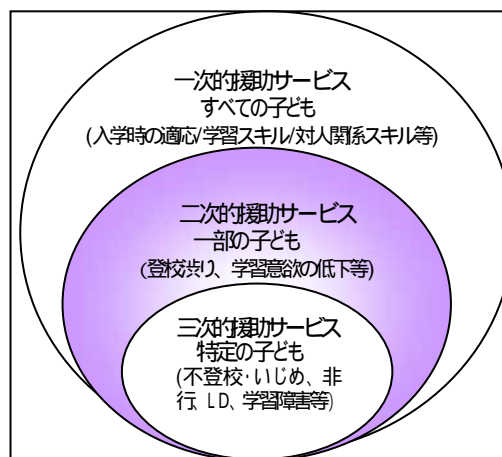


図7 3段階の援助サービス、その対象、および問題の例

- (1) 援助ニーズの高い生徒についての、的確な見方や有効なかかわり方へとつなげられる情報を共有できる場として学年会を活用し、その効果を検証していく。
- (2) 短時間で必要な情報を共有するためのワークシートを開発していく。

2 背景となる理論と考え方

平成17年度の文部科学省「学校基本調査速報」では、小・中学校で、12万人以上が1年間に30日以上の欠席がある不登校児童生徒数であると報告されている²⁾。中学校においては、平均で1クラスに1人の割合で不登校生徒が存在する。2000年の青少年健康センターの調査³⁾では、「ひきこもり」相談件数の約40%が小・中・高等学校での不登校の経験をもつという結果が出ており、不登校が子どもの将来に及ぼす影響も心配であり、早期の適切な対応が重要であると考えられる。また、学習面や、反社会的な行動面においても、様々な課題が累積している。

(1) 学校教育相談のとらえ方

このような事態に、学校教育相談という分野では何ができるのだろうか。大野(1998)は学校教育相談を次のように定義している⁴⁾。

学校教育相談とは、児童生徒の学習面、進路面、生活面の課題や問題に対して、情緒的のみならず情動的、評価的、道具的にもサポート¹⁾をするため、「軽快なフットワーク、綿密なネットワーク、そして少々のヘッドワーク」を活動のモットーに、「反省的实践家としての教師」というアイデンティティの下で、すべての子どもにかかわり、一部の子どもとしのぎ、特定の子どものつなげ、そしてすべての子どもがもっと遅しく成長・発達し、社会に向かって巣立っていけるように、学校という時空間をたがやすところのチームによる実践的な指導・援助活動である。

²⁾ 文部科学省 「学校基本調査速報」 平成17年度

³⁾ 倉本英彦『社会的ひきこもりへの援助-概念・実態・対応についての実証的研究』ほんの森出版 2002年 p.63,64,70

⁴⁾ 大野精一「学校教育相談の定義について」 教育心理学年報 第37集 1998年 p.158

¹情緒的, 情動的, 評価的, 道具的サポート = コミュニティ心理学で、ソーシャルサポートとしてあげられている、援助者が何を提供するかという、援助者の行動による分類(House, 1981)。

- ・情緒的サポート = 援助者が子どもに関心、信頼、傾聴、支持などの情緒的なはたらきかけを提供すること。
- ・情動的サポート = 子どもの課題への取り組みや問題解決に役立つ情報、示唆、アドバイス、指示などを提供すること。
- ・評価的サポート = 子どもの課題への取り組みの状況に対して、援助者が評価をフィードバックすること。
- ・道具的サポート = 子どもに対する具体的で実際的なサポート。援助者は子どもに物品、金銭、労力、時間、環境調整による助力を提供する。(『学校心理学』P244-247 より引用)

「学習面、進路面、生活面の課題や問題に対して」「チームによる実践的な指導・援助活動」という2点は本研究のめざす点であり、文部科学省を始めとする諸機関からも、その必要性が様々に示されている。

(2) 子どもを多面的に援助する

石隈らによる調査⁵⁾では、中学生は心理・社会面で悩むよりも、学習面で悩んだ経験の方が割合が高いという結果が出ているため、石隈は、進路面、心理・社会面での援助の実践においても、学習面への注目が大切であるとしている。本研究では、教科担任の子どもへのかかわりが援助の重要なポイントとなること、心理・社会面でスクールカウンセラーが、健康面・心理面からは養護教諭が、子どもを多面的に援助していくための大きな資源となることを常に意識しながら研究を進めていく。

(3) チームとして援助する

チームによる援助については、文部科学省の「少年の問題行動に関する調査研究協力会議報告(2003)」や国立教育政策研究所生徒指導研究センターの「中1不登校の未然防止に取り組むために(パンフレット、2005)」、神奈川県教育委員会の「ティチャーズガイド チームで取り組む日々の実践と不登校への対応(2005)」の中で、問題行動や不登校への対応策としてその必要性が示されている。

チームとして援助をしていくためには、援助者が共通した情報をもつための場が必要である。その一つとして事例検討会が考えられるが、信州大学の上村(2003, 2004)らが、埼玉南教育センターの論文⁶⁾をもとに事例検討会の課題として次の3点を実態調査により浮き彫りにしている⁷⁾。本研究では、「学年会はチーム会議である」ととらえ、この3つの課題を意識しながら、学年会やワークシートを活用していく。

意見交換の不足・・・参加者が多いほど協議時間が確保されにくい。
 要因分析の不足・・・問題があると学校は家庭環境を要因ととらえる傾向が強い。
 援助方針や役割分担明確化の不足
 ……援助方法の具体化、役割分担への満足度は高くない。

3 研究の方法

(1) 調査対象 川崎市内中学校1校

(2) 時期 7月～12月

(3) 研究の方法

授業観察 授業リフレクション 抽出児の検討・決定

研修員による2回の授業観察(総合的な学習の時間・学級活動)を行う。その後、観察記録等を活用しながら、研究会議で授業リフレクションを行う。その中で、日ごろの様子等も踏まえ、「気になる

⁵⁾石隈利紀 『学校心理学』 誠信書房 1999年 p.244

⁶⁾埼玉南教育センター「南教育センター方式を取り入れた事例研修会の工夫・改善に関する調査研究」-校内研修を通した「積極的な生徒指導」の推進を目指して-埼玉南教育センター研究報告書238号 1992年

⁷⁾上村恵津子他 「教育現場における事例検討会議の実態調査-千曲市の例に焦点を当てて-」
 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』、5 2004年
 酒井幸枝・上村恵津子 「保育現場における事例検討会議の実態に関する研究」

信州大学教育学部紀要110 2003年

生徒」に当たる二次的援助サービスの対象者として2名を抽出した。

Aさん		Bさん
周りの大勢に影響を及ぼさないが心に何か引っかかり、Aさん自身が悩んでいる	抽出理由	問題行動を起こしていて、その影響が周囲の生徒や教師にも及んでいる。
体調を崩しやすく、欠席が比較的多い。	健康	健康である。
まじめでやさしい。	心理・家族・行動	社交的だが自分の気持ちを大きな声で表現する傾向がある。
友人とのトラブルを自力で解決するのが難しい。		自分勝手な進め方に周りがついてこないことも多い。
意欲はあるが結果になかなかつながらない。	学習	提出物を期間内に提出するのが難しい。集中が続かない。

ワークシートの開発

「石隈・田村式援助チームシート」援助資源チェックシート⁸⁾を参考に、短時間で生徒の状況が多面的に理解できるような初回用ワークシート(資料1)を作成する。

第一回検証学年会準備

初回提示するのは、Aさんとする。学級担任がそのときに把握している状況を心理・家族・社会面、学習面、健康面からアセスメントし、現時点

資料1 初回用ワークシート

で研究会議として必要と考える、もしくは生徒自身がめざしているものを目標に設定し、そのための手立てを考える。

第一回検証学年会

学年会の学級情報交換の時間を研究対象とし、それを検証学年会とする。司会は学級担任が行い、初回は1時間かけて研究の趣旨説明、ワークシートの見方についての説明を行い、研究会議としてのアセスメントを報告する。その場でも参加者が情報を出し合い、Aさんについて学年としてのアセスメントを行い、各自ができそうな手立てを出し合いながら、今後の援助の方向性を確認する。学年会で出された新たな情報等は、担任を通じて研究会議で把握する。

参加者へのアンケート、第一回検証学年会の情報整理

学年会後、参加者に記述及び口頭により、次の項目でアンケートを行う。

- 1 会議に使用した資料について。会議の雰囲気について。
- 2 会議を通して抽出児についての新たな気づきや見方の変化について。変化の状況や原因について。
- 3 このような形式で生徒理解・指導を進めていくことについて。

学年会で新たに得られた情報や多面的にとらえるために必要だと思われる面の情報について、聞き取り調査等を行いながら情報整理シート(資料2)の項目に沿って情報を整理する。

⁸⁾ 石隈利紀・田村節子『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門 学校心理学・実践編』

第二回検証学年会の準備

学年会後のAさんの様子、どのようなかわりがあったか等について、情報整理シートにまとめる。多面的にとらえるため、心理・家族・社会面、学習面、健康面からアセスメントを行い、必要があれば目標を変更する。2回目からは、目標をそれぞれの面で、短期(1ヶ月後)、中期(学年終了後)、長期(中学校卒業後)の3段階に分ける。ワークシートは、手立てやその効果等がわかり、参加者に子どもの変化やかかわったことへの手ごたえが感じられるように作成する(資料3)。

さん これまでの情報整理シート 年 月 日	
生育歴	
小学校からの申し込み	
1年次	
2年次	

資料2 情報整理シート

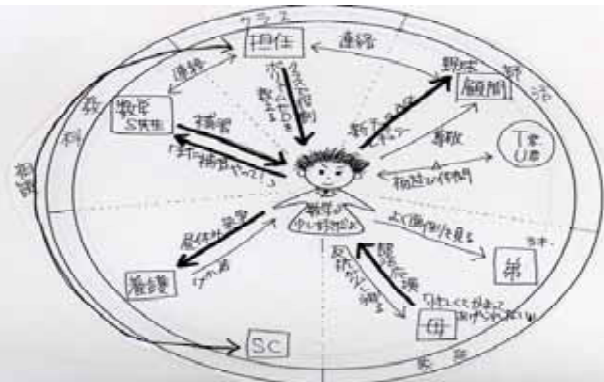
	担当	様子
国語		
社会		
数学		
理科		
英語		
音楽		
美術		
技家		
保体		
総合		
学級		
養護		
SC		
部活		
家庭		

援助シート 2年X組 M男 さん(担任！) 20XX年X月XX日(2回目)

目標 授業にできることに取り組む・友達とよいかかわりをもつ

これからの手立て
学習面 = 授業でできることを一つずつ取り組み、小さいことでもできたらほめる。できないときには、さりげなくアドバイスをする。
心理・社会面 = 思ったことをすぐ口に出さず、「ボリュームゼロ」を覚えるようにする。クラスで役割をもたせ、充実感を味わえる機会を増やす。

担任の思い
 先生方との関係も少しずつよくなり、表情が柔らかくなってきて笑顔も増えています。学習にも目が向いてきているので、授業中に充実感をもたせたいです。このチャンスを生かし、心理面も安心できる環境をつくれたらと思っています。今後ともよろしくお願いします。



効果・現状

- 夏休みから、6回も数学の補習を受ける。その時行きたい高校があることがわかった!
- 短い言葉で、具体的な行動への注意(座りなさい、しゃべらないなど)にはあまりかたしめない!
- 母が部活動の応援に来るようになった!
- 反抗的態度が全体的に減ってきている!

授業中は、おしゃべりがまだ多い。
 ・友人を傷つけるような言葉を口にする。
 ・たまに夜遊びをしている。

個人的に嬉しい事(数学)
 部活の練習を保護者へ連絡
 注意は短く、長い説教はしない
 禁句(家族?)を口にしない

有効だと思われる手立て

- 家族が題材の授業にはまったく参加する意欲がなかった。母の応援は嫌がらない、短い言葉での注意はよく聞く。
- 禁句を意識してかわることが有効かも。母との関係を安定するため、よいことを母に連絡していく。短い言葉で、近くで落ち着いた声で注意した方がより効果があった。

養護教諭の所見

相変わらず夏休みに友人と入室するが、落ち着かないことが減り、表情も穏やかなことが多かった。予鈴ではなかなか退室しないので、先生方のご協力をいただきたい。

スクールカウンセラーの所見

自己肯定感が低いようなので「よいことはみんなによく聞こえるように褒め、叱るときはこっそり。」がより効果的なのではないか。学校として、母親が子どもを褒める機会をつくっていき、親子関係を支えたい。

	心理・家族・社会面	学習面	進路面
短期目標 (今後一ヶ月)	ボリュームゼロを意識する	できることにまず取り組む	自分の未来像をもてるようになる
中期目標 (学年終了まで)	友達とうまくいく経験を積む	授業では皆と同じ課題に取り組む	
長期目標 (卒業まで)	感情をコントロールできる	希望する高校に合う学力を身につける	目的をもって進路を選択する

資料3 継続用ワークシート

第二回検証学年会

ワークシートは当日の午前中に配布する。学年会では、前回以降のAさんの変化や、有効だった手立て、今後の目標などについてワークシートを活用しながら報告し、その場でも情報や意見等を出し合い、今後の援助の方向性を確認する。小さい効果でも取り上げ、参加者が充実感をもてるように進行する。以上の繰り返しの中で4回の検証学年会を行い、アンケートの記述や生徒の変容等により効果を検証する。なお、ワークシートは、子どもの状態によって、資料4のように様々なパーツを入れ替えられるようにする。

<p>保健室での様子</p> <p>保護者の思い</p> <p>家庭での様子</p> <p>行動の背景として考えられること</p> <p>子どもの行動の背景を理解する必要が大きいときなどに</p> <p>医療機関、児童相談所、適応指導学級などからのコメント</p>	<p>日本語指導等協力者の所見</p> <p>特別支援コーディネーターの所見</p> <p>前学級での様子</p> <p>小学校での様子</p> <p>他機関の所見</p>	<p>日本語の指導を受けている子どもたちに・・・</p> <p>去年の担任から</p> <p>医療機関、児童相談所、適応指導学級などからのコメント</p> <p>友人関係の円</p> <p>コアチームの円</p> <p>小さなチームでの動きを入れても・・・</p>																
<p>欠席・遅刻・早退数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>4月</th> <th>5月</th> <th>6月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>欠席</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>遅刻</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>早退</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>			4月	5月	6月	欠席				遅刻				早退				
	4月	5月	6月															
欠席																		
遅刻																		
早退																		
<p>大切な個人情報ですので、シートには取扱注意や秘と入れて取り扱うなど、慎重に。会議での活用後は、まとめてシュレッターする、厳重に保管するなど、統一した取り扱いを。</p>																		

資料 4 その他のパーツ

4 研究の結果

(1) 学年会

雰囲気について

学級担任

学級担任は大きな不安を抱えて取り組み始めたが、参加者が好意的に受け入れてくれたことや情報を出してもらったことで、不安は安心へと変わった。12月に「先生方とのかわりを感じられた」「だんだん広げられたら」と感じたことも、その効果を実感できたと推察する。

「自分から先生方にアプローチする必要があると思った」と感じたこと

は、生徒をより深く理解しようとする思いが生まれたからであり、これは学級担任の変容であると推察する。

運営については、時間短縮のためにポイントを絞って進行した場合、触れた部分以外の項目を見てもらえただろうかという不安が残っていた。今回、学級担任が事例報告者と司会進行の両方を兼ねたが、「自分のクラスの子どものために時間をかけてもらい、意見を出してもらっている」という思いをもっていた面があり、時間の面だけでなく、情報を集めて発言を促すという点においても、事例提供者である学級担任と進行役は分けた方が有効なのではないかと推察する。

学級担任は、「夏休み中や抽出児があまり登校できていないときには、参加者にあまり子どもの実感が湧かないようだ」と感じた。教師は子どもの様子を思い浮かべながら具体的な手立てを考えるため、しばらくの間、生徒を目で確かめていないときには、援助の効果が上がりにくいのかもかもしれない。

【7月】

- ・研究についての説明もあったので1時間かけて行った。
- ・前向きな気持ちと不安な気持ちの比率は始まる前は50対50だった。終わった今は75対25くらいと、不安な気持ちが小さくなった。
- ・情報を出し合うことで終わってしまい、手立てを考えるまで行かなかった。
- ・いろいろと情報を出してもらえてうれしかった。

【8月】

- ・9月からAさんをどうするかについては、9月のはじめに本人に会ってから、9月上旬の学年会で話そうということになり、そんなに時間はかからなかった。
- ・夏休み中だったので、Aさんをイメージしにくいのかなと思った。

【10月】

- ・二人について、30分くらいかけて行った。
- ・Aさんは、まだ1週間しか登校できていないから情報が少ないのかなと思った。
- ・自分の方から、先生方に聞き取り、アプローチをしていく必要があると思った。
- ・時間が長くなり押さえどころがわからなかった。聞き手もどういところを協力していいのかわからなかったのではないかと。

【12月】

- ・二人について10分～15分くらいかけて行った。リラックスしたムードで入れた。
- ・今回は台本があったので順を追って話せた。台本がないとどこをポイントにするかわからず困ったが今回は大丈夫だった。しかし聞いている方は、ポイントしか見れていないのかもと思った。
- ・二人と**言わず、だんだん広げられたら**と思った。

これは、例えば休みがちになった場合などには、早急に取り組むことの必要性を表しているのではないだろうか。しかし、もし会議を開くタイミングを逃した場合は、資料や会の進行方法などの工夫によって改善できる部分もあると考えられる。

本研究では当初、学年会において参加者が活発な発言を交わす中で、生徒への援助を見つけ出していくというスタイルを想定していた。しかし時間的にも難しかったため、より効果的な短時間で会議とするために、情報を事前に集め、研究会議としての見方や手立てを学年会で提示し、その場で情報や意見等があれば出し合い、今後の援助の方向性を確認するというスタイルに切り替えた。

学年会参加者

もともと良い雰囲気で行われている学年会における実践だったこともあり、雰囲気について好意的にとらえる記述が多かった。12月には、この形式に参加者が慣れて、生徒をより深く理解しようとする会になっていた様子がうかがえた。

【7月】
 ・一人の生徒のために時間が取れたので、わかりやすかった。
 ・いろいろな教員が生徒に関わっているので様々な意見が出された。
【10月】
 ・Aさんのことで発言した先生が少ないように感じた。もう少しかわったり会話する先生が増えるといいなと思った。
 ・リラックスした自由な雰囲気がよかった。
【12月】
 ・資料や研究が浸透してきた。生徒の状態を把握しようしたり、接し方について考えたりするようになった雰囲気があり、大変よいと思う。

- 1 学年会を通しての抽出児の見方 (Aさんへの見方)

検証学年会とAさんの変容

学級担任

・他教科の様子が見えていなかったが、学年会を通してわかった。
 ・自分の知らないAさんの姿が見えて、Aさんの見方が変わった。
 ・頑張っているという教科担任からの情報があり、うれしかった。

学級担任は学年会を通して、頑張っている様子など、それまで見えていなかったAさんのよい面を見つけられ、Aさんをより多面的にとらえられるようになっていた。

	Aさんの様子
第一回検証学年会	体調を崩し、休みがち。
第二回検証学年会	部種に参加できるようになる。
通常の学年会	1ヶ月間、不登校になる。
第三回検証学年会	登校できるようになる。
通常の学年会	担任との信頼関係が深まる。
第四回検証学年会	友人関係は安定する。

学年会参加者

回を追うごとに、Aさんを観察している記述が多くなった。目立たないAさんだが、参加者の視線がAさんに向けられ、12月にはちょっとした変化を多くの参加者が確認し、成長を感じていた。学年会で取り上げたことは、Aさんのより深い理解につながったと推察する。

【7月】
 ・Aさんは授業内容がよくわかっていないことが多いが、明るく、前向きに取り組もうとする姿勢が見られる。しかし、友達との単なるおしゃべりになってしまうことがある。
 ・こうすればこうなるという結果に結びつきにくい生徒のように感じる。
【8月】
 ・Aさんを取り巻く状況がよくわかった。
 ・夏休み中の生活などがはっきりし、9月以降の接し方の参考となった。
 ・様々な観点からアプローチすることで、Aさんのイメージが良くも悪くも広げられた。
【10月】
 ・心の痛みがあるという理解が、Aさんの場合他の人より少しだけ必要だと感じた。
 ・他の子に声をかけられたりして、よい関係が生まれているのではないかと。
【12月】
 ・友人が変わると、本人もこんなにも変わるものかと、改めて感じた。
 ・小さい目標に向かい少しずつ進み努力している様子を最近よく見ることができた。
 ・目標のスムーズステップ化、家庭状況の再確認ができてよかった。

- 2 学年会を通しての抽出児の見方 (Bさんへの見方)

検証学年会とBさんの変容

学級担任

【10月】
 ・保護者とのよい関係の話を聞き、そういう面もあるのだと安心した。
【12月】
 ・どの先生方からも、「反抗的」というコメントが減ってきている。
 ・どの授業でも同じような行動を取っていることがわかった。

	Bさんの様子
第三回検証学年会	反抗的態度、授業妨害が続く。
通常の学年会	担任への反抗的態度が解消される。
第四回検証学年会	保護者、Bさん、担任との関係は良好。

「そういう面もあるのだと安心した」「どの授業でも同じような行動を取っている」などの新たな発見があり、Bさんを多面的にとらえていた。

学年会参加者

Bさんについては、目立つ行動が多いからか、Aさんに比べて初めから具体的なBさんの行動やかかわりの記述が多かった。しかし、12月には、Bさんについての新たな見方や効果的な手

立てについての反応が大きかった。このような影響力の大きな生徒を学年会で取り上げて手立て等を確認することは、援助へつなげやすい方法として受け入れやすいと推察する。

本研究で行った生徒指導・生徒理解の方法について

学級担任

学年会を通して学級担任は、一人で抱えなくていいのだという安心感をもち、抽出児を通して参加者とのかかわりを感じることができた。これは学年会が情報の交流だけにとどまらず、援助者である学級担任を情緒的にサポートする機能として働いたものと

考えられる。また、スクールカウンセラーや養護教諭と、学年会を機会に、日ごろから強いパイプができたと感じている。抽出児を通して学年の職員や専門家とさらに深くつながったことにより、援助者である担任を支える枠組みもできたと考えられる。

学年会参加者

10月までは、方法としてよいというとらえ方が多かった。しかし12月は、生徒の変化を見届けて、効果を実感して記述されたと思われるものが多かった。一方、時間の制約上、実際は難しいという記述があるように、このような生徒理解の方法は時間と労力をいかに短縮するかが課題となるのが浮き彫りとなった。「自分のクラスに当てはめて考えて

みたい」「自分のクラスのあの子と似ている」という記述からは、生徒の理解の仕方や援助の方法が、事例提供者の学級担任以外の学級担任にも効果をもたらしたと考える。

[10月]

・この会議まで家庭状況がわからなかったが、資料や発言で知ることができてよかった。
・昨年のクラスの様子や周囲とのかかわり、トラブルも踏まえたほうがよいのではないか？

[12月]

・雰囲気がよくなってきたと思う。
・声のボリュームがゼロにできないと聞き、確かにそうだそうだ！と思った
・Bさんについて継続的に発見することができたように思う。
・衝動的で注意力が低く幼いという認識をもって接すべきという確認ができてよかった。

[~6月]

・担任として、クラスの子ともかかわっているようで、かかわっていない。一番かかわっているのは、部活動ではないかと思う。

[7月]

・学年会を通して、自分自身が変わったと思う。
・学級担任として一から十まで一人でやる必要はないなと思った。そう思うと楽になった。
・専門的なことは、専門的な人に任せて、自分はやれることをやろうと思った。
・担任って自分のクラスの生徒のことを、あまり言わないものだなと改めて思った。

[8月]

・抽出児を通して、先生方とのかかわりを感じられた学年会だと思った。
・学年会を通じ、スクールカウンセラーから専門的なアドバイスを受けることができた。
・日ごろからよくスクールカウンセラーと話をするようになった。
・養護教諭は一步下がって自分を援助してくれている感じ。頼めばいろいろとやってくれて助かった。これは、抽出児に対して共通理解をもっていたからだと思う。

[7月]

・その場面ごとでなく情報を共有し、日頃の指導を考えていくことが改めて大切だと感じた。
・多くの先生の視点から一人の生徒をじっくり見つめていくと気づくことが多いとわかった。
・多くの生徒のことをこうい形でできればいいとは思いますが、それはなかなか難しい。

[8月]

・いろいろな先生方の視線で生徒をとらえることは、新たな発見もあり、とてもよいと思う。
・大変有意義だと思う。私の学級の生徒もこのような形で私の中で考えていきたい。

[10月]

・さまざまな角度、視点からアプローチしていくのは、Bさんにとっては大変よいと思う。
・具体的に生徒を理解する上で、学級や部活、委員会など各場面での状況から考えていくことが、一番よいのではないかと思う。

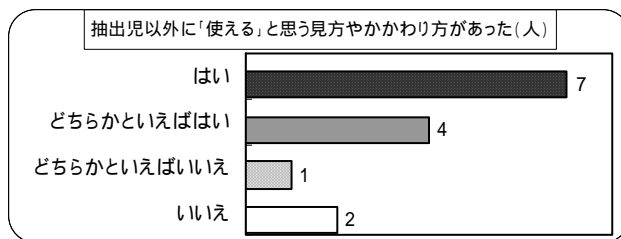
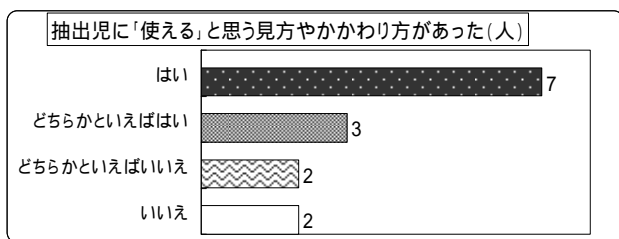
[12月]

・家庭や学級担任、教科などバランスよく生徒を観察し接することができ、プラスに転じる場面が多くなってくるのではないかと思う。
・様々な立場の人が同じ手立てを意識して生徒とかかわることによって、それぞれ声のかけ方や接し方、場面が違ったとしても、何かしらの変化が得られるということを感じた。
・時間がかかることだと思うが、この資料のように現状、手立てなど詳しく記されていると共通理解ができ、対応しやすいのではないかと思った。
・大変良いと思うが、実際問題のある生徒をすべてこのような形で迫るのは大変だと思う。
・Bさんは、私のクラスのCさんと似ているかもと思った。そうやって、自分のクラスの子に当てはめて考えることができるのも、学級担任にとって大きな収穫だと思う。

最終アンケート

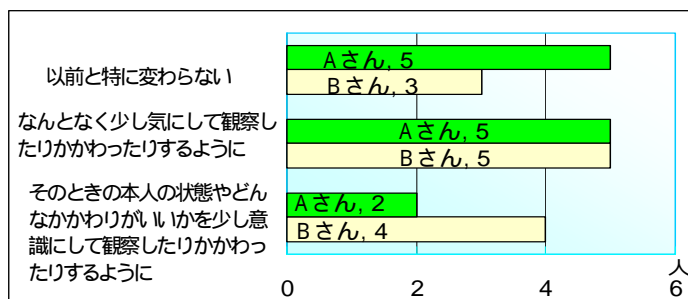
- ・対象 学年会参加者、養護教諭、スクールカウンセラー。各質問によってサンプル数は異なる。
- ・時期 12月下旬（アンケート5は8月～12月）

アンケート1 学年会を通じて「使える」と思った見方やかかわり方があった（人）



今回の学年会の形式が、2人の抽出児を理解し、どうかわっていかを提案する場として効果的であるだけでなく、その他の生徒への見方やかかわり方への応用にもつながったという結果となり、学年会が、抽出児以外を援助するきっかけとしても有効であることが確認された。

アンケート2 抽出児とかかわる際の最近の感覚や行動で当てはまるもの（人）



抽出児を気にかけてたり、そのときの状態やどんなかわりかやよいかを考えて接するようになった参加者が多く、このような視線を注いだことがプラスに働いた一因となったと推察される。「もっている情報をより生かしてかわるようになった」という点は、Bさんの方に強く出た。影響力の大きな生徒ほど、このような機会を通して教師の見方やかかわり方が変化しやすいと思われる。

このように、このような機会を通して教師の見方やかかわり方が変化しやすいと思われる。

アンケート3 学年会で出た情報で抽出児や抽出児以外に「使えると思った」「使った」見方や手立て（抜粋・人）

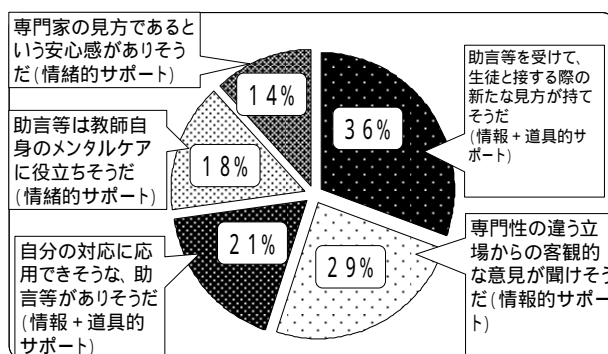
情報が参加者の間で共有され、的確な見方や有効なかかわりが抽出児との間に生まれたということが読み取れる結果となった。また、スクールカウンセラー（SC）の見方を反映させることは、有効であったという結果にもなった。

見方や手立て	情報元	本人に(10人中)		他の生徒に(11人中)	
		使えると思った(人)	使った(人)	使えると思った(人)	使った(人)
目標をスモールステップ化する	研究協議	6	1	4	5
周囲に「見えなけれど痛みがある」と理解させる	SC	6	1	6	2
衝動性が高く、注意力に欠ける面がある	研究協議	6	3	6	0
年長さんくらいだと思って接する	教科担任	5	3	2	1
人間関係をかき乱す言動を抑える練習をする	SC	4	3	4	3
「かき乱す生徒に巻き込まれない」という教師側の共通見解	SC	7	3	7	4
注意は短く、具体的に	研究協議	5	5	3	3
自分の席に戻らないと授業を始めない	教科担任	3	3	4	6

アンケート4

今後、スクールカウンセラーや養護教諭が参加する学年会で可能性としてもてそうと思われるサポートの内訳(%)

新たな見方がもてそう、客観的な意見が聞けそうといった面を期待する数値が高く、生徒へ生かせる情報や、対応するときに使う道具につながる助言等を、専門的な知識や経験をもつ養護教諭やスクールカウンセラーへ求めていると推察される。



アンケート5 スクールカウンセラー、養護教諭の学年会に参加しての感想

抽出児についてクラスや授業での様子が明らかになることは、養護教諭やスクールカウンセラーにとってもより深い生徒理解へとつながり、学年会がスクールカウンセラーや養護教諭にとっても、情報的なサポートとなっていたことがわかった。

【学年会について】

- ・生徒をいろいろな角度から見てあげることによって、たくさんの発見ができると思った。
- ・複数の視点、立場の違うスタッフがうまくいっている点を出し合うことは意味があると思う。
- ・学級担任が一人で抱えると大変だが、みんなで支援していいことが良かったと思う。
- ・周りの教師も共有した問題として考えてかかわってくれるので、学級担任は安心感をもてるということを再認識した。

【抽出児について】

- ・普段はクラスや教科での様子などがなかなか見えないが、今回はすごく見えてきた。
- ・自分の中で、これまでは、全校の中の一人であるAさんという感じだったが、会議後、その存在がとても大きくなっているように感じる。

(2) ワークシート

作成者（研修員）が感じたこと

作成するときに意識したこと

作成者となった研修員は抽出児の担任ではなかったが、「自分ならどうするか、いかに道具として使えるか」をイメージしながら自分のフィルターを通して作成した。

- ・自分のフィルターにかけ、自分ならどうするか、こうやってみたらどうかとイメージした。
- ・客観視するのではなく、共感的に寄り添う。とにかくケースをよく見るようにした。
- ・目標によってシートの内容が変わってくる。目標が変わったときには柔軟に対応した。
- ・何らかの手立てをとった参加者が、「やってみてよかった」と感じられるよう、小さい効果でもワークシートに書くように心がけた。
- ・いかに道具として使える手立てになるかを意識した。
- ・付せんを貼ったり取ったりしていくイメージで書く。必要なら、失敗例も載せるようにした。
- ・援助者の位置をできるだけ明確にするよう心がけた。
- ・簡潔にまとめたり、注目できる部分をつくったり、見やすいレイアウトや文章にした。

自分のこれまでの経験や集まった情報を総合して考えて記入していくという作業であり、子どもを多面的にとらえないとできない作業となっていた。

前回までのワークシートとの関連

前回までのワークシートでうまくいったこともいかなかったことも必ず振り返った上で、新たなワークシートを作成した。この過程は、教師自身の実践の振り返りにつながるものとなることがわかった。

- ・以前のシートは無駄ではなく、必ず振り返り、なぜうまくいったのかうまくいかなかったのかを冷静に考えて次に生かした。次に生まれ変わるという構造があった。
- ・ある手立ての重要性が、前は10のうち3くらいにしていたものが、子どもの状況の変化によって、次に10くらい(メイン)になったりした。

人間関係の円

生徒にかかわりのある人やかわりをすべて書くのではなく、生徒の

状況に合わせた目標に必要なかわりを精選して書く方がいいことがわかった。短時間の会議で使用するワークシートなので、必要な情報だけを精選して書くことが不可欠だと考える。

- ・限られたスペースなので、余計なことが書けず、ポイントしか残らなくてよかった。
- ・円の中にも、援助のテーマがあった。目標によって記載する内容が変わった。
- ・外部機関との連携が必要な場合は、それも明記する。

チームで書く

できるだけ必要な情報を一目でわかるようにすることを心がけた。手間はかかるが、人を介することで情報の核が簡潔に残ったワークシートへとつながった。

- ・担任が情報を集め、研修員がシートを作成し、さらにそれを長期研修員がコンパクト化したことで、情報の核が簡潔に残ったことがよかった。
- ・担任から情報が伝わる段階で情報が選択されていて、書いていて困らなかった。

作成して感じたこと

作成者は、書くということの重要性を強く感じている。書くことで、生徒に近づけたと実感している。本研究では、当初、漠然とした目標を設定して

- ・書くことは、ある程度自分の身体に入れて出すので、書いてみることで自分に意味があり、書くことで考え、頭を整理する時間ができてよかった。
- ・ワークシートのそれぞれの枠に書くことで、頭の中を整理できた。
- ・書くことで生徒の見方がはっきりし、援助の方向性が見え、ゴールが見えてきた。
- ・共感的理解をすることが、次の手立てにつながった。
- ・目標は生徒の行動や姿が具体的にないと、支援策が見えにくい。

いたが、生徒の理解が進むにつれ、具体的で確な目標が設定できた経緯がある。それは、作成する過程で、生徒を多面的に見ることができたからではないかと考えられる。

担任が感じたこと

人間関係の円

自分で書いたときには、Aさんの人間関係がわからなかったが、学年会での情報でAさんを取り巻く関係の線が増えてよかった。

中学校の学級担任は、生徒がどのような人間関係を持ち、どのように援助に生かせるのか、わかりにくい現状があると思われる。実際、第一回の検証学年会では、「Aさんを取り巻く関係の線が増えてよかった」と学級担任が振り返っている。これは、生徒を援助する学級担任自身が生徒をより深く理解できたということにつながったことだけでなく、共に援助している仲間が見つかったことでもあり、効果的であったと思われる。

・(8月以降、研修員が作成したことについて)書いてもらうことで負担が減った。
・複数の情報を職員から受け取ったときに、どの情報を作成者に伝えるか考えた。

チームで書く

書くことで、生徒に寄り添うという過程はとても重要であるが、学級担任にとって負担でもある。本研究では途中から研修員が書いたことが、援助者である学級担任を精神面、実践面でサポートしたことにつながった。学級担任は、手にした情報を使って次の手立てを考えるために、作成者に伝える情報を精選した。これは、学級担任が問題をどう処理するかを、抱え込み考えるという状態から、「次の手立てを見つけるために、その情報をどう生かすか」という一歩進んだ状態になっていた。

作成して感じたこと

担任として書きにくいと感じる点があることがわかった。生徒のどの部分を援助す

・「成績が悪い」などは書きにくかった。
・「いいところ」「気になるところ」では、埋められない欄があった。

るかを明確にするためには、生徒の弱い部分を記載することは避けて通れない。しかし、それは、援助を必要とする生徒の立場からの言葉で考えていくことにより解消され、より生徒を援助しようとする姿勢につながっていくと推察する。

また、1回目のシートを初めて書くときには空欄が多かったが、埋めようとしたことによって、生徒に視線を向き理解しようとする姿につながった。2回目のシートではすべてが埋まり、学級担任の生徒への見方は3回目、4回目と学年会ごとに少しずつ変化していった。ワークシートを通しての生徒への継続的な観察が、生徒の適切な理解につながった結果であると考えられる。

学年会参加者が感じたこと

7月には、視覚的に訴える人間関係の円に着目する参加者が多かった。普段のかかわりを視覚的に表すことはあまりないため、参加者の印象が強かったと思われる。また、この図によって援助する上での

【7月】

- ・一人の生徒へのかかわりをいろいろな方面からの手立てとしてビジュアルにまとめると、問題点や支援の在り方が浮かび上がり、次の援助につなげやすくなり、自分の支援の振り返りにもなる。
- ・関係図によってそれぞれの立場が明確になり、自分がどの位置でかかわればいいのか確認できた。
- ・手立てを図式化すると、こんなにたくさんの援助ができるのかと思った。
- ・「いいところ」や「気になるところ」があるので参考になる。
- ・気になる生徒について作成しておき、必要ときに活用するなど、いろいろな生徒に使えると思う。

【8月】

- ・生徒とのかかわりで足りない部分がわかりやすくなった。
- ・普段口頭だけで伝えることを見やすくまとめることで、より深く考察できたように思う。
- ・以前の資料より、かかわりが書き込まれていてよかった。
- ・さまざまなかかわりが具体的に書かれており、取組状況がわかりやすい。

【10月】

- ・情報整理カードも完成すれば、授業の様子も知ることができていいと思う。余暇活動がわかる欄があると、さらに支援策が見つかるかもしれない。
- ・前回から今回までの本人と周囲の状態が把握でき、今後に有用だと感じた。
- ・資料がだんだん学年会に浸透してきたと感じる。

【12月】

- ・凝ったつくりで、レイアウトも工夫している。Aさんの似顔絵が似ている。
- ・一生徒についてこのようなレジュメを用いて考えると、いろいろと客観的に見えてくると思った。
- ・現状や手立てから効果までの流れが具体的でわかりやすく、参考になる。

自分の立場が明確になり、どの位置で生徒にかかわればいいのか確認できたということは、援助者である教師にとっても効果的であったのではないだろうか。

8月には、取組が初めて図式化されたことで、改めて感じたことについて書いた参加者が多かった。生徒がどの教師とどのようなかかわりをもっているかを確認することの必要性が、改めて感じられたと推察される。

10月には、普段の生徒の様子を頭に浮かべながらワークシートを見ている様子がかえりうる記述があった。この月は、資料を提示するのが3回目だったが、「資料が浸透してきた」と感じた参加者もいて、継続的に使用することの有効性を示しているのではないかと推察される。

12月には、まとめ方やレイアウトについての感想が多かった。ワークシートを見る目が慣れてくると、内容だけでなく、使いやすさや見やすさにも目が向くようになるのではないだろうか。書く側だけでなく、見る側の視点からも、レイアウトの重要性は大きいと考える。

いずれの月でも、具体的な現状や手立ての流れや各自が見えていない部分が記載されていることについて評価するコメントが多かった。また、継続して使用すること、他の生徒への応用などを提案する回答もあったことは、ワークシートの有効性を示すものとする。

研究のまとめ

1 考察

本研究では、学校での教師と2人の抽出児とのかかわりに、「学年会の学級情報交換の時間」と「ワークシート」という2つの要素を加えたことを通して、2人がプラスの方向へ変容する様子を見取ることができた。

(1) 学年会

生徒にかかわる多くの教師が集まる学年会を、援助に必要な生徒の様子や取組状況などの情報を共有する場とすることで、生徒を的確にとらえ有効なかかわりをもつことにつながるということが明らかになった。学年会を通して情報を共有した後、普段の会話で抽出児についての情報交換が盛んに行われたと、学級担任から報告を受けている。限られた学年会の時間がきっかけとなり、共通して援助が必要だと認識している生徒についての情報交換を行うことは、生徒への理解をさらに深めることや困っている教師が一人で抱えることを防ぐことにもつながっていくのではないだろうか。

学級担任は学年会で出された有効だと思われる手立てを抽出児に使ったり、抽出児にと考えた手立てを学級全体に応用して使ったりしていた。また、援助ニーズが急に高まった生徒について、その生徒と抽出児の行動に共通点を見つけられたことで、対応がうまくいった件もあったとの報告もあった。一方、自分の学級の生徒と抽出児との共通点を見つけ、抽出児への見方やかかわり方をその生徒に応用しようと考えた学級担任もいた。抽出児のための学年会が、他の援助を必要としている生徒たちへの間接的な援助となったことが明らかになった。教師は、それぞれが生徒とうまくかかわっていく方法をもっている。それを自分のものだけにせず、学年として共有し、それを各自が自分に合った形に変えて生徒とかかわっていくことは、有効なかかわりが波及することにつながると考えられる。学年会はその情報交換の有効な機会になったと推察する。

学年会に養護教諭とスクールカウンセラーが参加したことは、ワークシートの所見や学年会における発言等で教師の新たな見方につながった。人間関係がうまく築けない生徒たちや、サインが見えにくくなっている生徒たちを効果的に援助するためにも、本研究を養護教諭やスクールカウンセラー

と教師がさらに連携していくための一つの例として提案したい。

抽出児の2人と教師との間にはよりよいかかわりが生まれ、安心感をもって学校生活を送っているという報告を受けている。このような方法で生徒を見ていくことは、援助を必要とする生徒の側から見ても、場面ごとでない「点から面への連続性のある有効なかかわり」が生まれていた結果であり、学年というチームの「援助する力」が高まっていたと考える。

(2) ワークシート

ワークシートを作成する一連の流れを実践することは、生徒を多面的に見ることへつながることが明らかとなった。そして、生徒を多面的にとらえることができたとき、よりの確な見方ができるようになり、生徒に必要な目標が明確にされ有効なかかわり方を探ることができた。学年会参加者のアンケートからは、今回のワークシートが参加者の的確な見方や有効なかかわり方へとつながったことが読み取れた。つまり、ワークシートは作成する側、見る側双方に有効であるということが見えてきた。

援助ニーズの高い生徒についての情報を学級担任が取り入れる際に、「その情報を次の手立てにどう生かすか」という視点でとらえ、生徒の行動を意味あるものとして探ることになっていたことは、ワークシートの利点であった。また、新たなワークシートを作成する際、それまで行った手立てがどのような効果を出しているのかを検証し次の手立てを考えたことが、普段の忙しい毎日ではなかなかできない、「観察 情報収集 指導・援助 振り返り」といった教師自身の生徒へのかかわりを見つめ直すことにつながっていった。進級時や中学校入学時においても、このようなワークシートを活用していくことが、継続的に生徒を援助するための縦のチームの形式となり、本市の中学校での大幅な不登校出現率の増加を抑える手段として有効なのではないだろうか。また、本研究は中学校のみの実践となったが、工夫することで、小学校にも応用できると考えられる。

2 今後の課題

(1) 学年会

多忙な中で援助ニーズの高い生徒をすべて学年会で取り上げることは現実的には難しい。しかし、ケースを重ねていくことで、他の生徒に応用できる面が生まれ、すべての生徒を同様に取り上げる必要はなくなると思われる。また、状況に応じて、例えば学級担任、スクールカウンセラー、養護教諭といった小さなグループをつくり、必要な報告は学年全体に行う形も可能である。特に不登校の場合、小グループで動きながらも学年全体に生徒の様子を継続的に知らせ、生徒についての的確な見方やかわり方を伝えておくことで、次に生徒が登校できたときに効果的な教師のかかわり方が期待できると思われる。運営面では、学校内や学年内にコーディネーター的な存在の役割を誰かが担い、学級担任と共に準備等を進めることが望ましいと考える。

専門職の学年会への参加については、養護教諭はすべての学年に毎回参加することが難しいが、情報交換の時間だけでも各学年に参加したり、学期に1回は各学年に参加したりするなどの工夫も考えられる。スクールカウンセラーは少ない勤務時間を削っての参加となり、時間を合わせることは厳しい状況にある。教育相談センターのスクールカウンセラーへのアンケートでは、スクールカウンセラー自身が年々学校との連携は図れていると感じる割合は増えているという結果が出ている。しかし、その連携の在り方については、まだ模索しているという記述が多い。それは学校側も同じなのではないかと考える。学年会への参加を、連携を進めていく一つの選択肢として考えてみることもできるのではないかと考える。

(2) ワークシート

ワークシートを作成することは、時間や手間がかかり、書く負担は決して軽くはない。しかし、一度作成する、または、目を通しておくことで生徒への理解が深まることが明らかになっている。今回使ったワークシートでは、生徒の状態によって、削除してもいい項目や逆に追加する項目を工夫して入れることによって、書くという負担が少し緩和されることも考えられるし、また例えば、チームの中に書く役割をつくることで、学級担任の精神的・実践的負担を軽減できるのではないかと考える。書籍や研究会等で様々なワークシートも提示されているので、生徒や学校に合わせて活用することが望まれる。しかし、いずれも個人情報を含むものであり、慎重に扱うことに留意する必要がある。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- 石隈利紀 『学校心理学』教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』 誠信書房 1999年
- 石隈利紀・田村節子 『石隈・田村式ワークシートによるチーム援助入門 学校心理学・実践編』 図書文化社 2003年
- 石隈利紀・山口豊一・田村節子 『チーム援助で生徒とのかかわりが変わる』ほんの森出版社 2005年
- 山口豊一 『学校心理学が変える新しい生徒指導』 学事出版 2005年
- 大野精一 「学校教育相談の定義について」 教育心理学年報 第37集 1998年
- 上村恵津子他 「教育現場における事例検討会議の実態調査 - 千曲市の例に焦点を当てて - 」 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』No.5 2004年
- 森田洋司編著 『不登校 その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』教育開発研究所 2003年
- 村瀬孝雄 『中学生の心とからだ 思春期の危機をさぐる 新版』 岩波書店 1996年
- 文部科学省 不登校問題に関する調査研究協力者会議「今後の不登校へのあり方について(報告)」 2003年
- 文部科学省「少年の問題行動に関する調査研究協力会議報告」 2001年
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 「中一不登校生徒調査(中間報告)」 2003年
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター「中1不登校の未然防止に取り組むために」 2005年
- 神奈川県立総合教育センター『ティーチャーズ・ガイド チームで取り組む日々の実践と不登校への対応』 2005年
- 川崎市総合教育センター 「児童生徒の学習と生活についてのアンケート」 2005年
- 文部科学省・神奈川県・川崎市 「学校基本調査」 2004年・2005年
- 川崎市 「川崎市小中学校教育基本調査」 2005年

【指導助言者】

- 横浜国立大学大学院人間教育科学部助教授 芳川 玲子
- 信州大学教育学部附属教育実践総合センター助教授 上村恵津子
- 川崎市総合教育センター指導主事 亀山 益恵